

異世界の天文観測塔に
転生した元営業マンの
 Ω カントが宮廷占星術
師 α に「星が告げた、
お前は俺の運命の番だ
」と発情期を天体観測
中に迎えて星図の上で
カントを開かれる話

「あ……っ、やだ……っ、星図が……汚れ……っ♡」

仰向けに押し倒された背中の下で、羊皮紙がくしゃりと潰れる。丹念に描いた天球図。何十時間もかけてインクで引いた軌道線。その上に、押しつけられている。

星図台の冷たい石が背骨に食い込む。けれどそんな痛みより、今ずっと怖いのは——脚を持ち上げられて、あの人の広い肩に担がれていること。

ローブの裾がめくれ上がっている。腰まで。その下の、誰にも見せたことのない場所が夜気に晒されて、ひくり♡と震えた。

「——星が告げました。お前は、俺の運命の番だ」

低い声。静かな、丁寧な言葉遣い。なのにその声だけで下腹の奥がきゅうっ♡と疼いて、蜜がじわりと滲む。

（なんで。なんでバレた——三年間、完璧に隠してたのに——）

セレンの長い指が太腿の内側を辿った。ゆっくり、正確に。星の軌道を指でなぞるみたいに。

「ひっ……う、触らない、で……っ♡」

口を手の甲で押さえて声を殺す。涙が滲んでいた。恐怖なのか屈辱なのか、もうわからない。わかっているのはただ——この男の指が近づくたびに、ソコが勝手に反応してしまうということだけ。

「ずっと知っていましたよ」

セレンの群青色の瞳が、天測儀の向こうの星よりずっと近い距離で射抜いてくる。

「あなたが Ω であること。——カントボーイであること」

心臓が止まった。

三年間で何よりも恐れていた言葉が、こんなにも静かに、こんなにも丁寧に突きつけられた。

「ち、が……僕は、 β で……っ」

「嘘ですね」

指先が布越しに、ソコの形を確かめるように押し当てられた。ぬるりとした感触が伝わったのだろう。セレンの目が一瞬だけ細まる。

「ここから甘い匂いがしている。抑制香の下の、あなた本来の匂い。—— Ω の発情の匂いだ」

「あ……っ♡」

布越しに割れ目をなぞられただけで、身体がびくんと跳ねた。石の台に背中が打ちつけられ、散らばった星図がばさばさと床に落ちていく。

「三年間、よく隠しましたね。でも星は嘘をつかない」

セレンの指がもう一度、ゆっくりと上へ辿る。恥丘の上。クリトリスのある場所を、布の上から——ぐ、と押した。

「んっ……♡♡ やあ……っ」

声が漏れた。必死で噛み殺した筈の甘い声が天文観測塔の石壁に反響して、自分の耳に返ってくる。

——三刻前に遡る。

* * *

「ヒナタ、北天第七星区の記録、これで合っているか」

「はい、合ってます。二等星の傾角が修正されてますね、前回より〇・三度ずれてたのお見事です、さすがですセレンさま」

にこりと笑って、先輩天文官に星図を手渡す。三年間磨いてきた営業スマイル。前世でもこの世界でも、僕の生存戦略はいつだって同じだ。便利で、愛想がよくて、頼みを断らない人間でいること。

天文観測塔の最上階。夜風が石壁の隙間から吹き込んで、インクの匂いと古い羊皮紙の乾いた匂いを攫っていく。天測儀——巨大な銅製の天体観測器具——が部屋の中央に鎮座して、磨き上げられた表面に星の光を映している。

（今日で抑制香の残り、あと三日分……）

羊皮紙にインクを走らせながら、頭の隅でそろばんを弾く。闇市の仕入れが途絶えて二週間。塗布式の抑制香は一日二回、朝と夕方に塗らないと効果が持たない。給金の七割がこれに消える。残りで食って、残りで生きる。

(次の発情期まであと六日。ぎりぎり……いや、足りないな)

手が震えそうになるのを意志で押さえ込む。三年間やってきた。なんとかなる。いつだってなんとかしてきた。

前世で過労死して、気づいたらこの世界にいた。異世界転生。しかも——男の身体なのに、股の間には男性器じゃなくて女性器がついていた。おまけに Ω 。発情期が来る。 α の匂いで膝が笑う。冗談じゃなかった。

カントボーイ。この世界では希少種。見つければ「番」として囲われる。自由を失う。それだけは——前世で会社に使われ潰された僕にとって、それだけは嫌だった。

だから隠した。三年間、完璧に。抑制香で Ω の匂いを消して、 β として登録して、愛想と要領のよさで「便利な記録係」としてこの塔に居場所を作った。

「ヒナタ、茶を」

その声に心臓がびくりと跳ねる。

セレン・アストライオス。宮廷占星術師。この塔の実質的な主。

天測儀を覗き込む横顔をちらりと盗み見る。漆黒の長い髪を一つに束ねて、群青色の瞳に星の光を映して。切れ長の目、薄い唇。冷たくて、美しくて、近寄りがたい。

身長差は二十センチ以上ある。僕が隣に立つと子供みたいだ。二十三歳で僕より四つも年下なのに、この人の前に立つとどうしようもなく矮小な気分になる。

「はい、どうぞ」

茶碗を差し出す手が微かに震えているのを自覚して、笑顔で誤魔化す。

セレンは茶碗を受け取ると、一瞥もくれずに天測儀に視線を戻した。いつものことだ。この人は僕に興味がない。塔の人間全員に興味がない。あるのは星だけ。

(それでいい)

心臓がどくどく鳴るのは——恐怖だ。 α のフェロモンに Ω の本能が反応しているだけだ。好意なんかじゃない。断じて。

先輩天文官たちが一人、また一人と休憩に降りていく。当直の交代時間。最上階に残るのは、いつも僕とセレンだけだ。

夜が深まる。天測儀の歯車がかちりと回る音。インクの滲む音。羊皮紙を広げる乾いた音。静かで、張りつめた空気。

セレンが天測儀から顔を上げた。

いつもと違う。この人がこの時間に天測儀から離れることは滅多にない。

「——ヒナタ、あなたはこの塔に来て三年ですね」

「は、はい……」

突然の私的な質問に、営業スマイルが張り付いたまま固まる。

「三年間、一度も休みを取らない」

「いえ、その、仕事が好きなので……」

「闇市にも通っている」

胃がきゅっと縮んだ。

「何を買っているのですか」

「……………」

（何を知ってるんだ、この人——）

頭が高速で回転する。前世の営業マン時代に叩き込まれた危機管理能力。まず笑え。冗談にしろ。はぐらかせ。

「あはは、闇市って。僕が行くのは美味しい焼き菓子のお店ですよ、路地裏にあって——」

「ヒナタ」

遮られる。低く、静かに。名前を呼ばれたただけなのに——全身の毛が逆立った。

セレンが星図台の上に広げた大きな星図を指し示す。インクで描かれた無数の軌道線。その中の二つの星の交差点に、細い指先が触れた。

「今夜、この二つの星が合になります。——番の星配列です」

「番の……」

「ええ。この塔の中にいる α と Ω の、番の配列です」

空気が凍りついた。

インクの瓶を握る指が白くなる。呼吸を整えろ。動揺するな。 β のふりを続けろ。

「セレンさま、僕は星読みは専門外で……番の配列と言われてましても」

「ええ、あなたは記録係ですからね」

セレンの群青の瞳が真っ直ぐにこちらを見た。

「——では教えてさしあげましょう。この星配列は、この塔の中に α と Ω の番がいることを示しています。 α は一人しかいない。——俺です」

沈黙。

「 Ω も一人しかいない。そうですね？」

「……この塔に、 Ω なんていませんよ。全員 β 登録ですし——」

「登録上は、そうですね」

それ以上セレンは言わなかった。天測儀に視線を戻して、また銅のレンズを覗き込む。

けれど僕の心臓はもう壊れるんじゃないかというほど暴れていた。

（逃げなきゃ。今すぐ塔を降りて——）

——いや。だめだ。いつも朝まで作業している僕が今夜に限って降りたら、それこそ答え合わせになる。

(座れ。作業を続けろ。平常心……)

震える手でインクに筆を浸す。線を引く。ぶれる。修正する。また引く。

今朝の抑制香は六時間前に塗った。効果は十二時間。あと六時間は持つ。持つはずだ。

次の発情期は六日後。まだ大丈夫。

(大丈夫。大丈夫だから——)

自分に言い聞かせながら、線を引く。星図の上に、いびつな軌道を。

* * *

二刻が過ぎた。朝の鐘まであと三刻。

最初に気づいたのは——手の震え。

インクの線がぶれた。さっきよりもずっと大きく。修正しようとした指が言うことを聞かない。

(……なに、これ……?)

次に、体温。額に汗が浮いた。塔の最上階は夜風が吹き込んで肌寒いぐらいなのに、身体の内側からじわじわと熱が這い上がってくる。

そして——下腹部。

奥の方から、じわり、と。

(まず……い……)

全身から血の気が引いた。

発情期だ。予定より三日早い。抑制香で周期がずれていた——長期使用の副作用。

(だめだ、今じゃない、ここじゃない——)

腹の奥で熱が広がる。カントの奥から、とろりと甘い蜜が滲む。太腿の内側を伝って、ローブの裾に染みを作っていく。

体温がどんどん上がる。皮膚が過敏になっていく。ローブの布が擦れるだけで全身にぞわぞわと鳥肌が立つ。

なにより——匂い。抑制香を塗った今朝から八時間。塗布の効果はもう限界に近い。その下から Ω のフェロモンが滲み出し始めている。自分でもわかるほど、甘い。

(立て。塔を降りろ。今すぐ——)

腰を浮かせようとした。脚に力が入らなかった。

ヒートの初期症状。筋弛緩。膝が笑って立ち上がれない。星図台の縁を掴んでかろうじて身体を支える。

「——匂います」

一言。静かな、確信に満ちた一言。

セレンが天測儀から顔を上げていた。群青の瞳が、こちらを見据えている。

「なん、の……匂いですか……」

「 Ω の発情期の匂いです。——ヒナタ、あなたの匂いだ」

膝が折れた。

星図台の縁から手が滑り、すがるように台の面に手をつく。ばさばさと羊皮紙が散る。自分が丁寧に写した星図が足元に散乱していく。

もう隠せない。

セレンが椅子から立ち上がった。百八十七センチの長身が影を落とす。近づいてくる。天測儀の横を通り過ぎて、星図台の前まで。

「逃げなくていい」

「っ……」

「逃げてても無駄です。朝の鐘まで三刻。あなたがこの匂いのまま塔を降りれば、階下の当直全員にΩだと知られる」

退路を断たれた。

上に残ればセレンと二人きり。降りれば全員にバレる。

目の前が霞む。涙なのか、発情期の体温上昇による眩暈なのか。三年間守ってきた秘密。三年間被ってきた仮面。それがいま——剥がされていく。

「……なんで」

声が掠れた。

「なんで、黙ってて……くれないん、ですか……」

セレンの長い指がこちらに伸びてくる。顎を持ち上げられた。群青の瞳が至近距離にある。星の光を閉じ込めたような、深い色。

「黙っていられると思いますか」

静かな低音が鼓膜を震わせる。その声が身体の奥を直接揺さぶって、カントがきゅう♡と締まった。

「——星が、お前を俺の番だと告げたのに」

指先が頬に触れた。涙を拭うように。そのままローブの襟に滑り、鎖骨をなぞり、降りていく。

「三年間、ずっと見ていました」

「……っ」

「あなたの手の動き。インクの匂いの下に隠れた甘い匂い。闇市で抑制香を買うあなたの背中」

指が胸元を通過して、腹に。

「——全部知っていて、星の確証を待っていただけです」

涙がぼろぼろ溢れた。止められなかった。三年分の恐怖と緊張が全部、溶けて流れ出てくる。

「やだ……っ。知られたくなかった。僕がカントだなんて——」

「カントボーイ。——ええ、それも知っていますよ」

セレンの手が腰に回った。ふわりと身体が浮いて——星図台の上に押し倒される。背中に散らばった羊皮紙がくしゃりと潰れた。

冒頭に、時間が繋がった。

* * *

ローブの裾がめくり上げられていく。

乱暴じゃない。ゆっくりと、丁寧な。星図に新しい線を引き足すみたいに、慎重な手つきで。

「……見せてくれますね」

命令ではない。問いかけ。けれどその声に拒否権なんかない。 α の低い声が鼓膜から直接身体の芯に響いて、抗えない。

ローブの裾が腰を越えた。華奢な太腿が露わになる。その間——男性器ではなく、発情期の蜜で濡れて光る女性器。カント。

夜風が素肌に触れて、反射的に脚を閉じようとした。

「あっ……見ないで……っ♡」

「綺麗ですね」

セレンの第一声がそれだった。

ヒナタの思考が止まった。

「……きれ、い……？　こんな……男なのに——」

「男のあなたにこれがある。それが綺麗だと言っている」

(なにを……言って……)

コンプレックスの塊だった。前世でも今世でも、この身体が嫌いだった。男なのに女性器がついている。触るのも嫌で、存在を無視して生きてきた。それを——綺麗だと。

考える余裕は一瞬しかなかった。セレンの長い指がカントの外側にそっと触れる。

「ひぁ……っ♡♡」

触れられた。初めて、他人の手で。ソコを。

「触られたことがないんですね」

「ない、です……っ」

声が震えている。恥ずかしい。怖い。でも——セレンの指は星図の線を辿るように正確で、丁寧で。それが余計に厄介だ。乱暴だったらまだ怒れた。拒めた。こんな風に大事そうに触れたら、身体のほうが勝手に——

とろ♡と蜜が溢れた。セレンの指先を濡らして、石の台に染みが広がる。

「っ……やだ、それ……っ♡♡」

「発情期の自然な反応です。恥じることではない」

（恥じるよ……っ♡♡　こんなの、恥ずかしいに決まってるだろ……っ♡♡）

指先が割れ目に沿って滑り降りた。上から下へ。薄い皮膚の向こうに隠れた肉襞を、直に撫でる。ぬるぬるの蜜が指に絡んで、かすかに水音が鳴った。

「ん、んっ♡　んんっ……♡♡　だめ……そこ、敏感……っ♡♡」

「どこが気持ちいいか、教えてください。あなたの身体のことを知りたい」